城下のまち鶴岡将来構想

鶴岡駅前地区将来ビジョン

（素案）

令和４年2月

鶴　岡　市

〈目次〉

はじめに 1

序章　構想の背景・目的 2

第1章　駅前地区を取り巻く状況 5

1. 駅前地区の変遷 5

2. 駅前地区の現状・特性 6

3. 駅前地区の課題 14

第2章　駅前地区のあり方 15

1. 将来において配慮すべき動向・条件 15

2. アフターコロナを見据えた変化・新たな条件 18

3. 将来の生活・社会像 19

4. 将来の生活・社会像における駅前のあり方 21

5. 駅前まちづくりのターゲット 22

第3章　駅前地区将来構想 23

1. 駅前地区の将来像 23

2. まちづくりの方針 24

3. 想定される導入機能 26

第4章　駅前地区等の整備・運営方針 29

1. 駅前地区の整備方針 29

2. 学び・活動エリア拠点の整備・運営の考え方 32

3. 学び・活動エリア拠点の整備・運営方針 34

資料編 40

1. 城下のまち鶴岡将来構想鶴岡駅前地区将来ビジョン策定の経過 40

2. 城下のまち鶴岡将来構想策定委員会 41

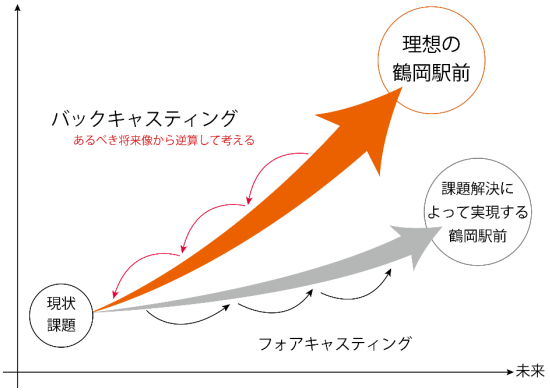
はじめに

鶴岡市の顔として発展してきた鶴岡駅前も、全国の地方都市の駅前と同様、かつてのにぎわいが薄れてきています。

駅前構想を検討にするにあたり、ICT や IoT、AI 等のデジタル技術の普及、働き方やライフスタイルの多様化、国際化の進展、新型コロナウイルス感染症拡大など、社会情勢が急激に変化している現代では、課題解決型の手法で鶴岡駅前の 10 年先、20 年先の未来を見通すことは容易ではありません。しかし、未来を見通さないことには、プランを描くことはできません。急激な状況の変化に対応していくためには、“現状”に捉われずに未来を想像する必要があります。

本構想の策定にあたっては、このような社会変化を踏まえながら目指すべき未来をはじめに描き、次に、この未来に向かう道筋を逆算的に検討する「バックキャスティング」と呼ばれる手法を用いて駅前の構想を描きました。これにより、課題解決の延長からは想像しきれない、理想的な未来を描くことが可能となります。

■バックキャスティングを利用した駅前構想の検討



本構想の策定にあたっては、この手法に「選択と集中」の観点を加えました。

駅及び駅前の利用者特性を踏まえ、私たちは駅を多く利用する高校生を主として、駅前を利用する子育て家族や活動意欲の高い高齢者にターゲットを絞りました。また、新たな人流を生み続ける仕組みを構築するため、一度に全てを整備するのではなく、段階的に整備を進め、徐々に満足する人々を増やし、最終的にはみんなが満足する姿を理想としました。

結びに、本構想がハード整備によらない駅前再開発の新たな手法として、鶴岡駅前を生まれ変わらせるだけにとどまらず、駅前だけでなく市全体にもにぎわいが広がり、人とまちを育てる鶴岡の指針となることを期待いたします。

令和３年〇月

城下のまち鶴岡将来構想策定委員会

序章　構想の背景・目的

（１）構想の背景・目的

本市は江戸時代、最上氏によって最初の町割りが行われ、その後、元和８年（1622 年）に酒井家 14 万石が置かれたことにより、鶴ヶ岡城（現在の鶴岡公園）を中心に城下町が整備され、現在の鶴岡市の基礎が築かれました。明治維新後は、城郭跡が鶴岡公園や荘内神社となり、その周辺に郡役場や町役場、朝暘学校などの官公庁や教育施設が集中的に整備されました。

現在の鶴岡市の中心地は、このような鶴岡市役所等が存する官公庁地区を中心としてその周辺の歴史・文化施設を多く有する地域と鶴岡駅からまちづくり上のシンボル軸となる逆Ｌ字に伸びた商店街によって構成される範囲であり、中心市街地活性化基本計画においてこれらの範囲を中心市街地として位置づけています。

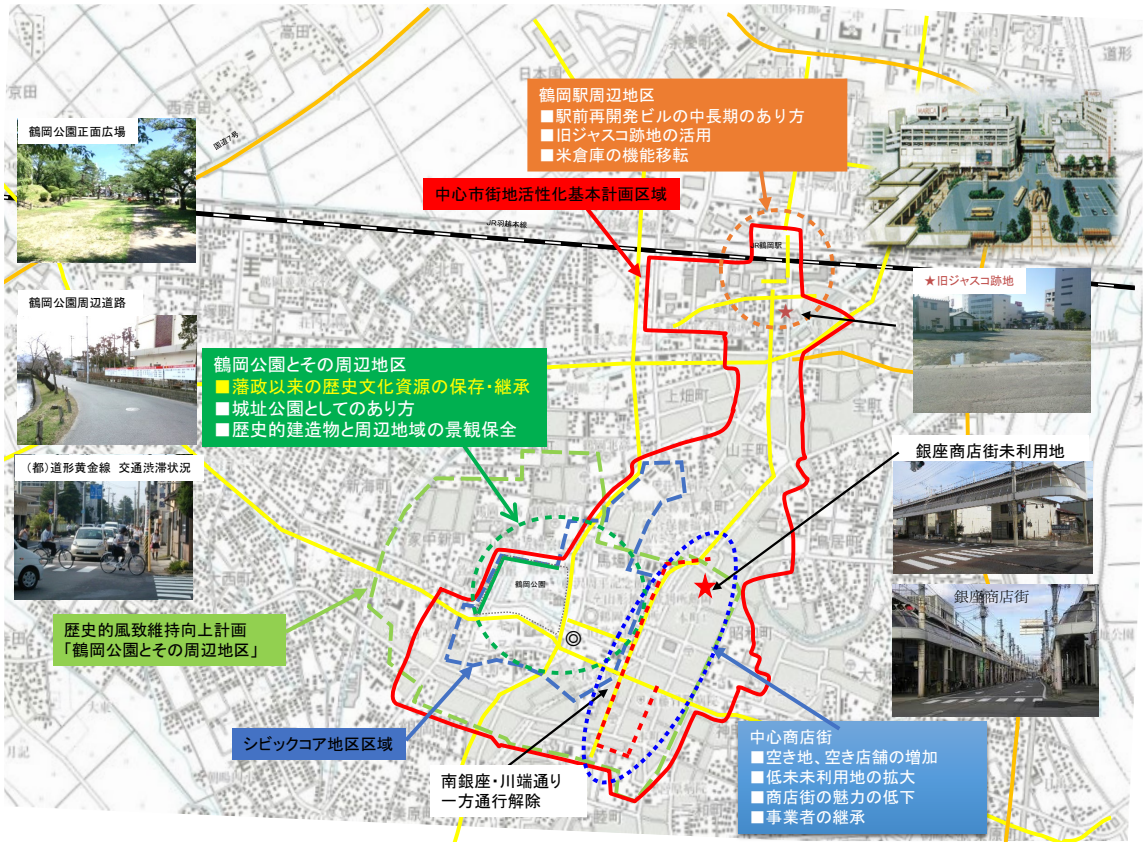
中心市街地では、人口減少や高齢化の進行に加え、世帯数も減少し地域社会が大きく変化しているとともに、店舗数や小売販売額の減少、観光客入込数の減少等産業面での衰退も進んでいます。

また、中心市街地の北部に位置する鶴岡駅前地区においても、大正８年の当時の陸羽西線鶴岡駅開業以降、商業や産業が集積し、昭和 60 年代には市街地再開発事業が行われ駅前地区としての活況をみせていましたが、再開発事業から 30 年が経過し、再開発施設の主要設備の更新時期を迎えていることや大規模遊休地の発生などの課題が生じ、かつてのにぎわいが失われつつあります。

こうした状況のなか、本市では 2022 年に迎える酒井家庄内入部 400 年を節目として、地域の歴史文化への理解を深めながら、郷土への愛着と誇りの醸成、鶴岡の魅力発信と交流人口の拡大を目指すこととしており、中心市街地においても庄内藩政以来の歴史文化資源の保存・継承・活用を検討するとともに、数十年先の将来を見据えたまちづくりを進めています。

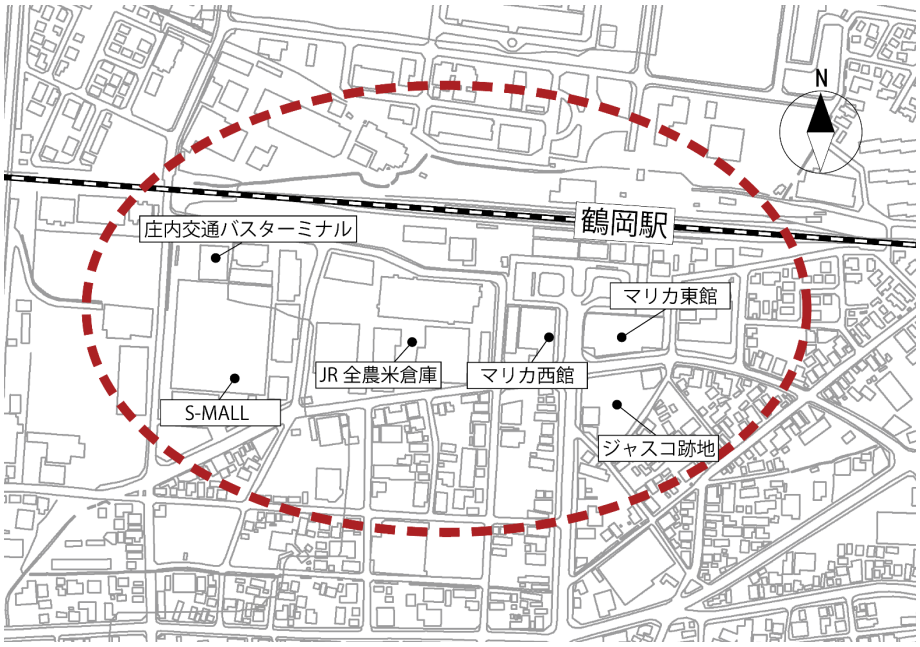
城下のまち鶴岡将来構想は、将来の生活、社会、まちのあるべき姿を想定し、駅前地区のグランドデザインを示すことを目的に策定するものであり、本市が抱える課題の中でも喫緊の課題である駅前地区の課題解決に取り組み、その効果を市全体に波及させるものです。

■中心市街地の各種計画区域



（２）対象範囲

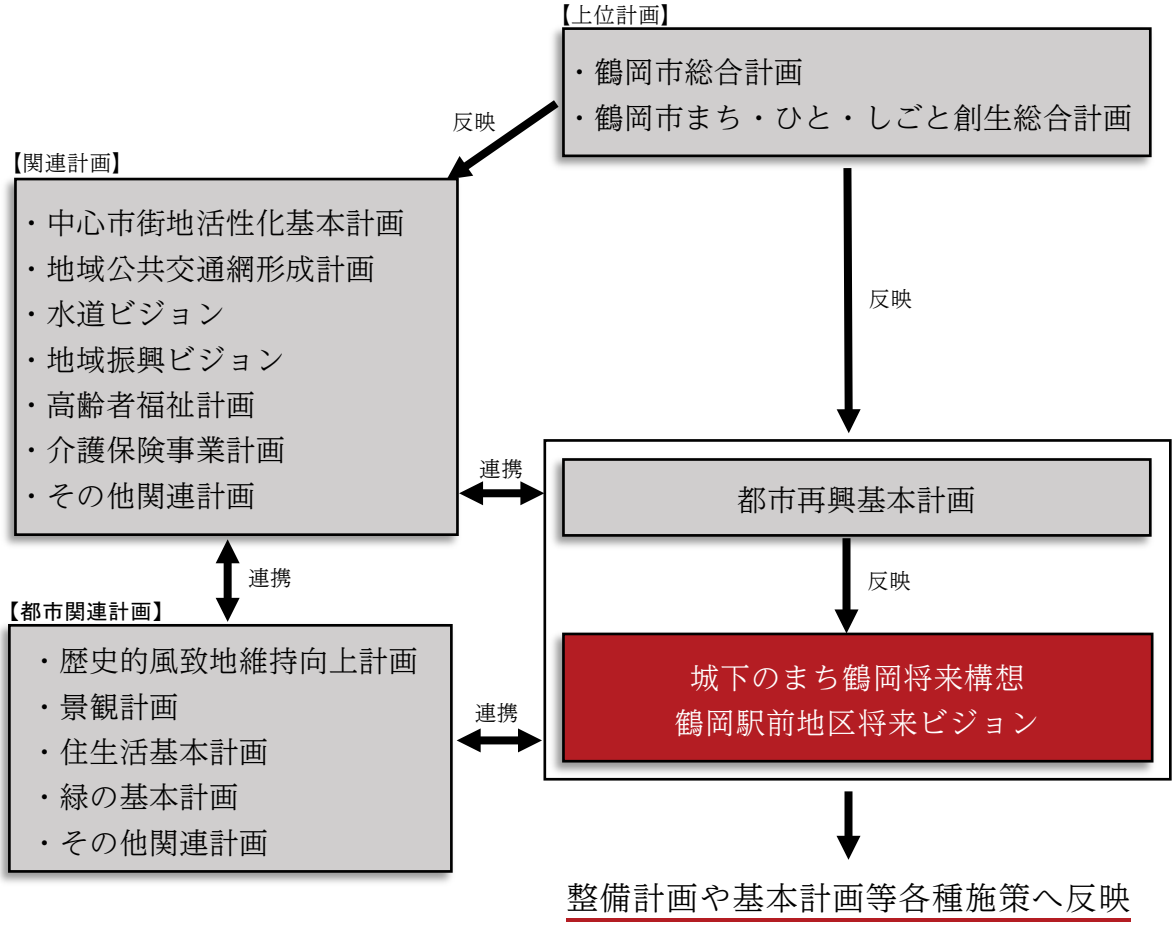
本構想は、鶴岡駅南側の約 12ha を対象範囲とします。



（３）構想の位置づけ

城下のまち鶴岡将来構想鶴岡駅前地区将来ビジョン（以下「駅前構想」という。）は、上位計画である「第２次鶴岡市総合計画」及び「鶴岡市まち・ひと・しごと総合戦略」に基づき、都市再興基本計画を踏まえて中心市街地活性化基本計画などの関連計画と連携を図りながら策定します。

■計画体系における本構想の位置づけ



第1章　駅前地区を取り巻く状況

1. 駅前地区の変遷

鶴岡駅前地区は、大正８年に現在地に鶴岡駅が開設し、平成 31 年に開設 100 周年を迎えました。昭和 27 年から土地区画整理事業により面整備が行われ、昭和 62 年には鶴岡駅前地区市街地再開発事業により、マリカ東西館が整備されました。平成 17 年に旧ジャスコ鶴岡店が閉店し、以降再開発施設の公共的利用が進められてきました。平成 29 年にはマリカ東館１階にユネスコ創造文化都市情報発信拠点として FOODEVER が開業しました。

■駅前地区の現状

- 1919（大正８年）　鶴岡駅開業（現在地）
- 1929（昭和４年）　庄内交通湯野浜線開通
- 1974（昭和 49 年）　市街地再開発等調査実施
- 1975（昭和 50 年）　庄内交通湯野浜線廃線
- 1984（昭和 59 年）　鶴岡駅前地区第一種市街地再開発事業決定
- 1987（昭和 62 年）　マリカ東西館オープン
- 2005（平成 17 年）　旧ジャスコ鶴岡店閉店
- 2005（平成 17 年）　マリカ東館ショッピングセンター閉店
- 2009～2010（平成 21～22 年）　マリカ東館の公共的利用
  - 庄内地域産業振興センター（H21）
  - 子育て広場まんまルーム（H21）
  - 教育相談センター（H22）
- 2017（平成 29 年）　マリカ東館 FOODEVER オープン
  - FOOD ＋ EVER
  - 「鶴岡の職を楽しめる飲食店・マルシェ」
  - 「ユネスコ創造都市情報発信拠点」
  - ①鶴岡市観光案内所
  - ②食文化情報発信スペース
  - ③文化体験スペース

1947 年　鶴岡駅付近

資料：国土地理院

1976 年　鶴岡駅付近

資料：国土地理院

2016 年　鶴岡駅付近

資料：国土地理院

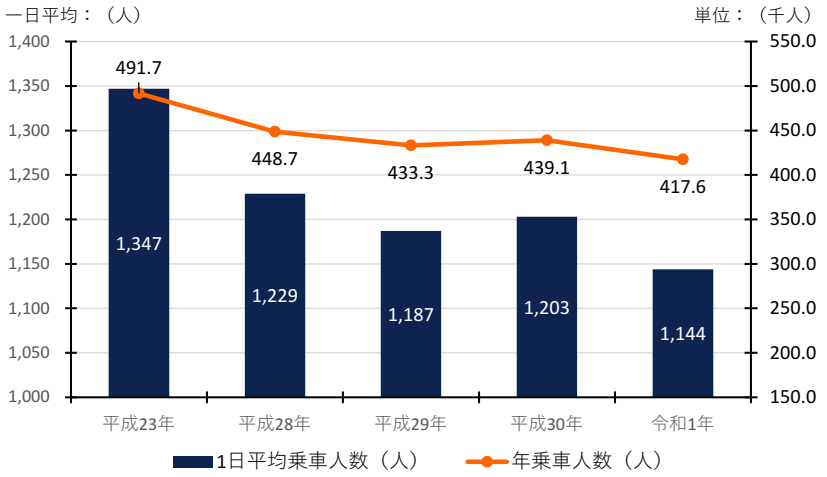
2. 駅前地区の現状・特性

【交通機関】

① JR 駅乗降客数の減少、その 6 割が高校生

令和元年の鶴岡駅乗車人数（降車人数含まず）は約 417,600 人であり、平成 23 年以降減少傾向にあります。また、令和元年度における鶴岡市内の高校の鶴岡駅利用者は 713 人であり、令和元年の一日平均乗車人数 1,144 人（降車人数含まず）に対して、約 6 割が高校生の利用であることが伺えます。

図　鶴岡駅乗車人数



資料：JR 東日本

表　各学校鶴岡駅利用者数

高校名	在籍数（3学年計）	鶴岡駅利用者数
鶴岡南※	584	98
鶴岡北※	348	80
山添	40	0
鶴岡工（全）※	569	163
鶴岡工（定）※	22	25
鶴中央※	711	39
加茂水	86	24
庄内農	159	39
庄内総合	255	24
鶴岡東※	638	92
羽黒	897	30
鶴岡高専※	841	48
合計	5150	713
※うち鶴岡市内	3713	

② バスターミナル利用者数の伸び悩み

平成 30 年時点の S-MALL バスターミナル発のバス利用者数は約 458,600 人であり、平成 23 年以降減少傾向にありますが、近年は 40 万人台で増減しています。

一方、庄内空港乗降客数は年々増加し、鶴岡駅-空港線のバス利用者数も増加傾向にあるものの、バス利用者の大幅な利用増加にはつながっていません。

図　バスターミナル発バス利用者数

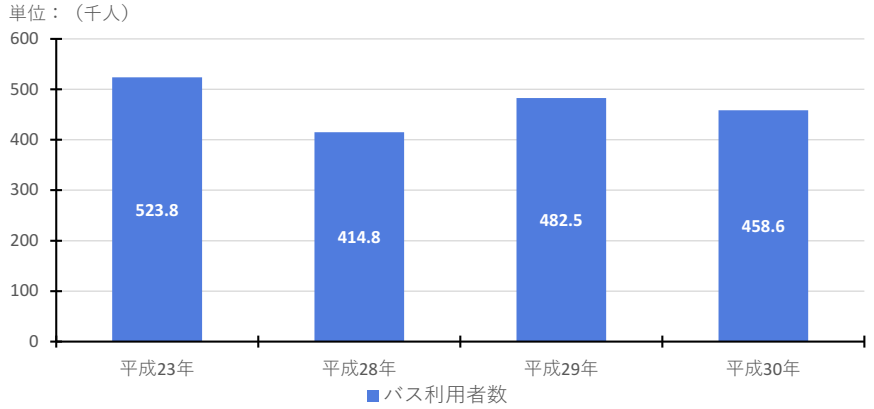
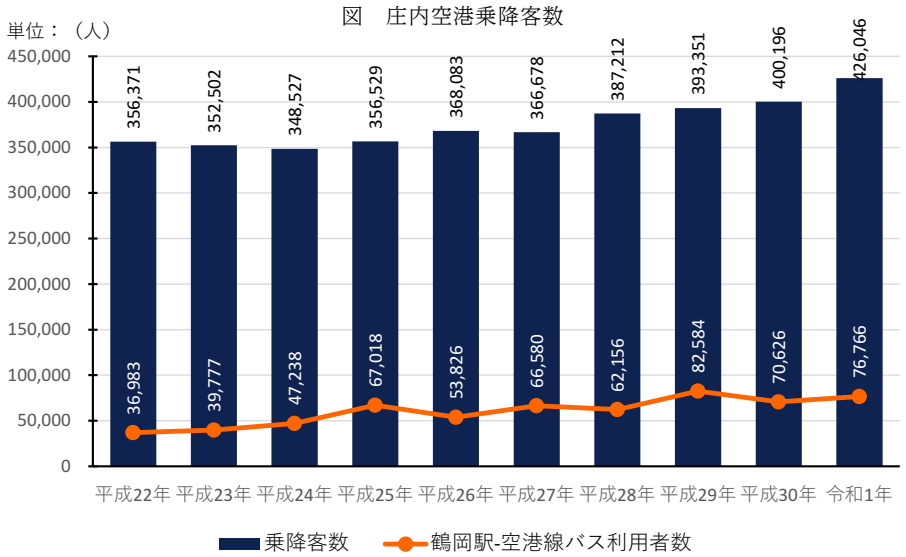


図　庄内空港乗降客数



資料：空港管理状況調書

【観光・宿泊】

③ 観光客利用の増加、宿泊施設の立地増

観光案内所の令和元年の来所者数は 22,033 人であり、過去 10 年は 19,000 人前後で増減をくり返し推移していますが、ここ数年は増加傾向にあります。なお、全日的なインバウンドの増加に合わせて令和元年度まで外国人の来所者も増加傾向にあります。

また近年は、駅前地区は観光・ビジネス需要の高まりにより、ホテル等の宿泊施設が多く立地しています。

図　観光案内所来所者数

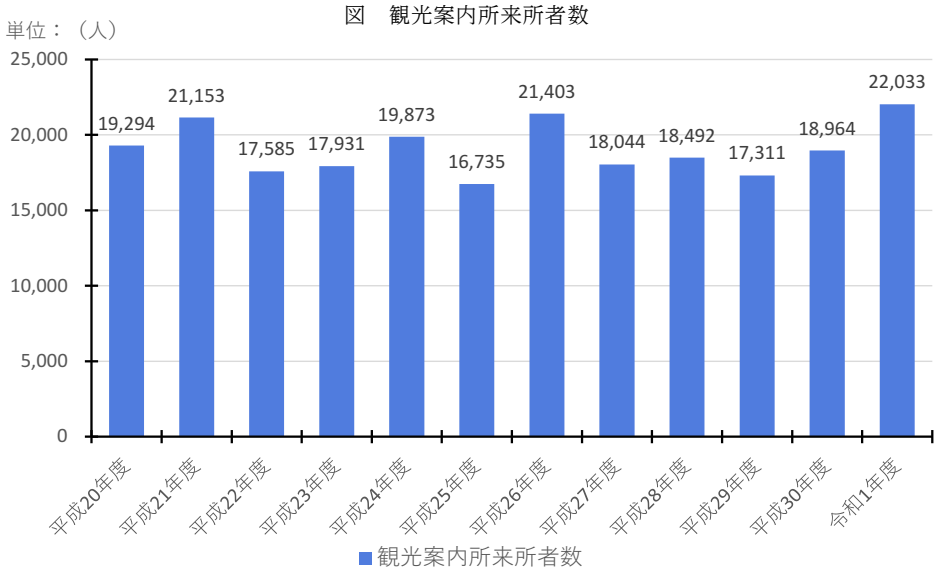


図　観光案内所外国人来所者数

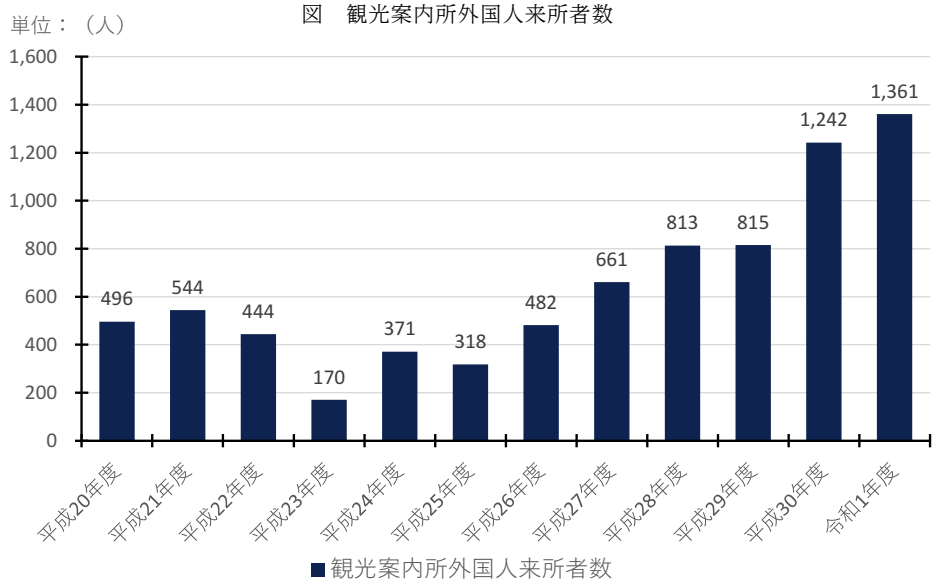
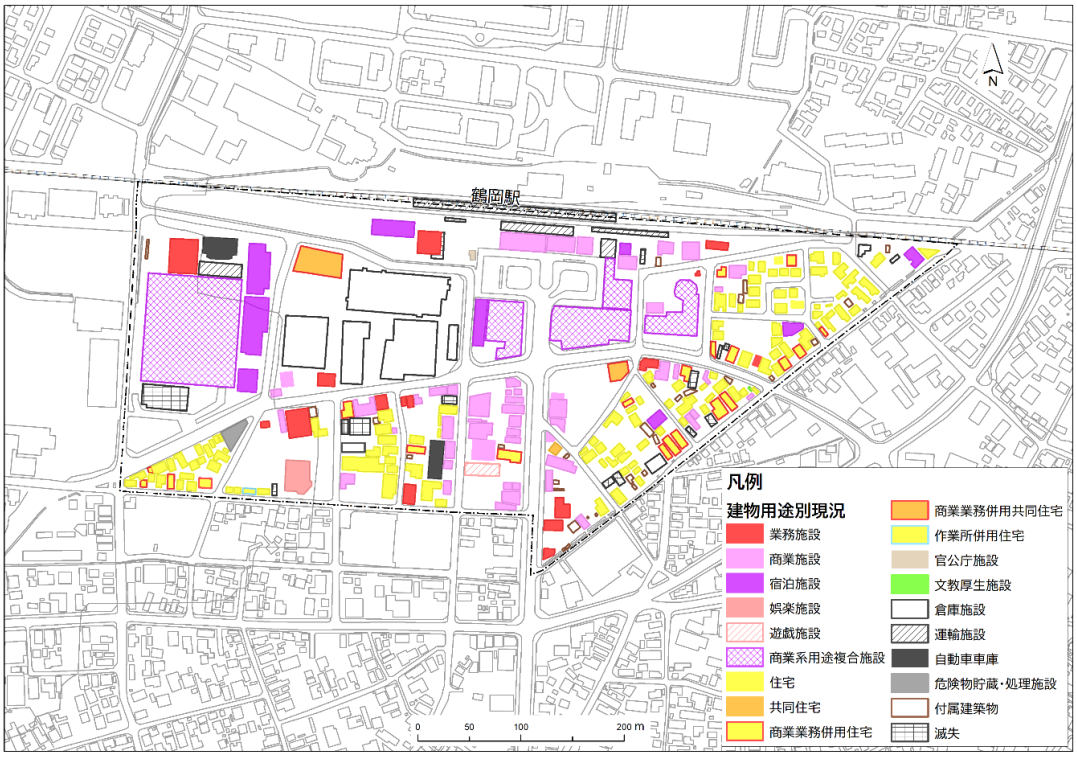


表　観光案内所来所者数

	年別推移	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和1年度
観光案内所実績データ	来所案内件数	19,294	21,153	17,585	17,931	19,873	16,735	21,403	18,044	18,492	17,311	18,964	22,033
	内訳：日本人	18,798	20,609	17,141	17,761	19,502	16,417	20,921	17,383	17,679	16,496	17,722	20,672
	内訳：外国人	496	544	444	170	371	318	482	661	813	815	1,242	1,361
	電話案内件数	2,738	2,602	2,157	2,255	2,543	2,380	2,423	2,004	2,246	2,046	2,216	2,523
	自転車貸出件数	2,692	2,595	2,114	2,150	2,385	2,079	2,723	2,673	2,180	2,151	1,966	2,259
外国人宿泊者数（鶴岡市内）					2,786	3,635	2,760	4,226	4,952	6,530	13,370	7,886	13,047

図　建物用途現況



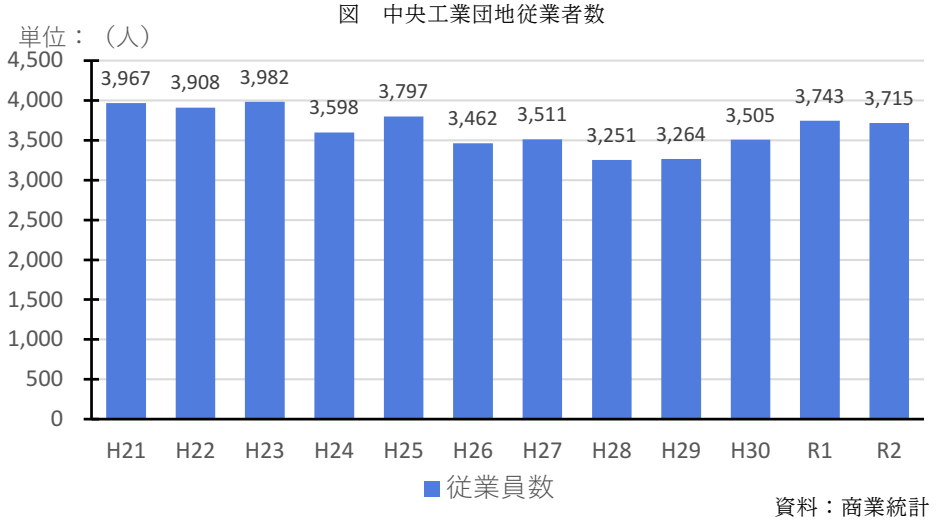
【商工業】

④ 商工業施設の立地、小売販売額の減少

鶴岡駅北側は、従業員数約 4000 人規模の工業団地を形成しており、産学・雇用において高いポテンシャルを持ったエリアとなっています。

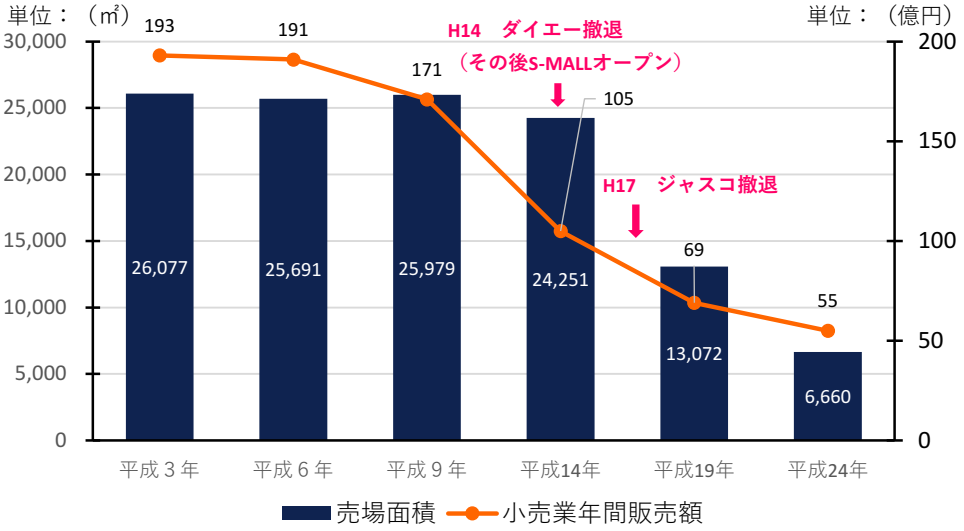
一方、駅前地区の商業は、平成 14 年にダイエー撤退により、小売販売額が減少しました。その後、S-MALL としてリニューアルオープンしましたが、駅前の旧ジャスコ鶴岡店の撤退により駅前地区の売場面積、小売販売額ともに減少しています。

図　中央工業団地従業者数



資料：商業統計

図　売場面積・年間販売額（末広町・錦町）



資料：経済センサス・商業統計

【マリカ東西館の施設利用】

⑤ 子育て支援、起業支援施設利用の増加

マリカはこれまで主に商業施設として利用してきましたが、近年は市民、社会ニーズに対応した子育て支援や起業支援などの新たな使い方が展開されています。

子育て広場まんまルームの令和元年の利用者は 18,462 人であり、これまで年間約 2 万人前後の利用者がみられます。

コワーキングスペースの令和元年度の利用者は約 950 人であり、平成 27 年度の開設以降、年度内利用者は 800～1000 人前後で推移しています。また、会員登録累計者数は増加傾向にあります。

さらには、平成 29 年に FOODEVER が食文化情報発信拠点として開業し、観光等の PR の中心となっています。

図　子育て広場まんまルーム利用者数

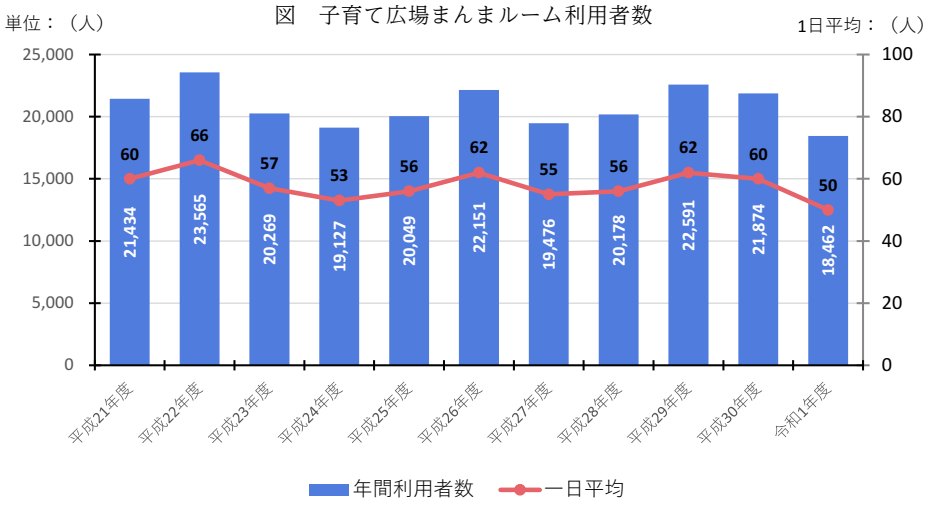
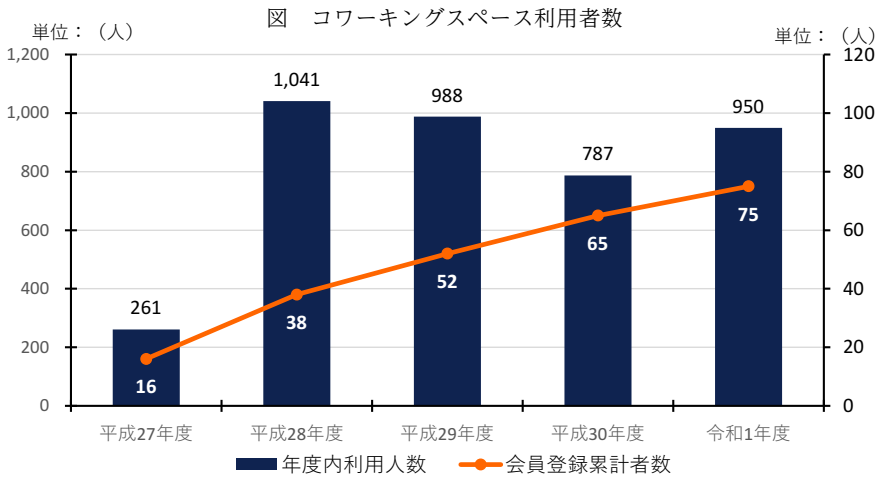


図　コワーキングスペース利用者数



⑥ 再開発施設の老朽化、大規模遊休地・空き地

昭和 62 年に再開発事業によって整備されたマリカは、現在東館が市所有、西館が区分所有となっており、それぞれ市と西館管理組合によって管理されています。マリカ東西館は、築 32 年が経過し、設備の更新次期を迎えているため、計画的な設備改修が必要となっています。

また、駅前地区には平面駐車場が多く分布しているとともに、旧ジャスコ跡地が未利用となっています。最近は区域内での民間開発の動きもあり、駅前地区全体の土地利用方法の検討が必要になっています。

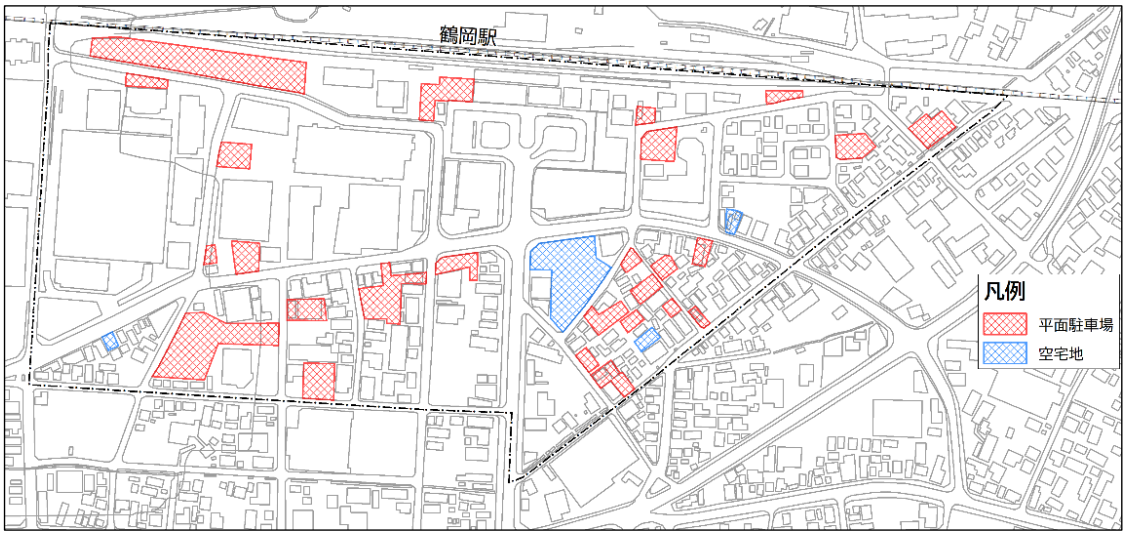
表　マリカ東西館の概要

建物名	マリカ東館	マリカ西館
権利関係	市所有	区分所有
築年・構造	S62 築　SRC 造　地上 6 階	S62 築　SRC 造　地上 8 階
延床面積	15,583 ㎡	10,755 ㎡
利用状況	・まんまルーム ・庄内産業振興センター ・FOODEVER ・教育相談センター ・DEGAM ・民間事務所（5 区画） ・民間倉庫（2 区画）	・鶴岡市（市民ホール、開発公社） ・ホテル ・民間店舗（3 区画） ・民間事務所（12 区画）
直近改修必要設備	①空調設備	①空調設備 ②中央監視装置

図　マリカ東館

図　マリカ西館

図　空き地現状図



3. 駅前地区の課題

鶴岡駅前地区は、大正８年の鶴岡駅の開設に始まり、整備、発展してきましたが、開設から 100 年を経た現在、前項の現況、状況、特性を踏まえて、次のような課題が整理されます。

■駅利用者の変化

駅の利用者は減少傾向であり、乗車人数（降車人数含めない）は平成 23 年の 492,000 人/年から令和元年には 418,000 人/年に減少しています。また、駅利用者のビジネス利用が減少し、普通列車の利用の大半が高校生に変化しており、駅利用者の約６割が高校生となっていることなどから、利用者の実態を踏まえた交通結節点としての駅前のあり方の検討が必要になっています。

■駅前の魅力の低下

大規模小売店舗であった旧ジャスコ鶴岡店が閉店し、商業機能が低下するとともに、小売販売額も大きく減少しています。また、駅前地区の通行量が減少しており、特に休日の通行量が低迷していることから、駅利用者が滞留し、市民が訪れたくなる魅力や機会などによるにぎわいの創出が必要になっています。

■施設設備の更新の必要性、大規模遊休地等の存在

再開発ビルであるマリカは築 32 年が経過し、主要設備の更新時期を迎えています。また、平成 17 年の旧ジャスコ鶴岡店の閉店に伴い、駅前に大規模な遊休地が発生しており、その利活用が課題となっています。

■駅前に行く機会・用事の減少

大規模商業施設閉店が発端となって小売店舗等が撤退したことにより、マリカの利用者が減少し、市民が駅前を利用する機会・用事が減少しています。一方で、子育て支援施設や起業支援施設といった専門施設の利用者は増加しており、市民ニーズや将来を見据えた地区の利活用が課題となっています。

第2章　駅前地区のあり方

1. 将来において配慮すべき動向・条件

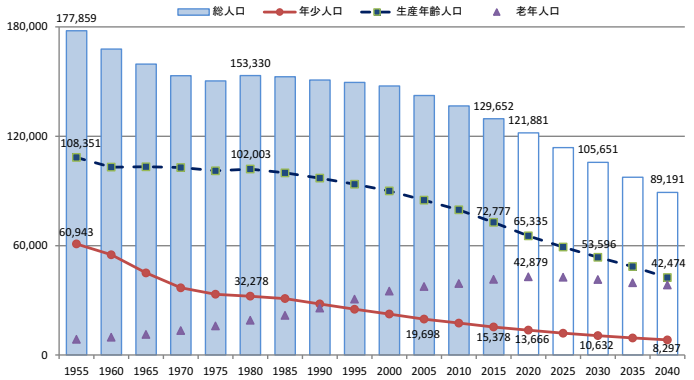
駅前地区の課題を踏まえつつ、将来構想を策定するにあたり、将来において配慮すべき動向や条件は次のように整理されます。

【人口減少】

■人口減少、少子高齢化の進展

鶴岡市の総人口は年々減少し、少子高齢化の影響により今後も人口減少が続くものと予測されています。老年人口※は引き続き増加しますが、2020 年をピークに緩やかに減少することが予測されます。また、年少人口※も減少傾向が続き、2040 年には 2015 年の半数近くの 8,297 人にまで減少し、少子化は一層進行するものと予測されます。

図　人口の推移と将来推計



※老年人口：65 歳以上の人口

※年少人口：15 歳未満の人口

資料：第 2 期鶴岡市まち・ひと・しごと創生総合戦略

【デジタル技術の進展】

■AI 等の普及による生産、業務の変化

AI の普及が業務の効率化や新たな商品・ビジネスモデルの開発につながることが期待されています。

■ICT、IoT 等の技術革新による生活・社会の変化、高度化

ICT や IoT 等の新技術の活用が、人口減少や高齢化等の課題解決や急速に進むグローバル化への対応など社会の高度化や変化をもたらすことが期待されています。

【幸福の尺度の変化】

■生活の質や幸福等人々の価値観の変化と社会の多様化

生活に求めることの変化や選択肢の増加に伴い、人々の価値観の変化や社会の多様化がみられます。

■働き方の変革による生活、居住、余暇等のライフスタイルの多様化

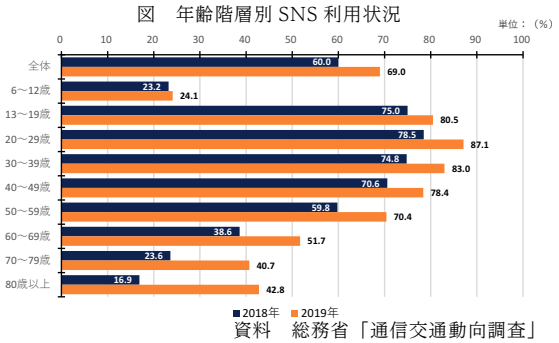
時間や場所にとらわれない働き方が可能となり、居住や余暇等のライフスタイルが多様化しています。

【シビックプライドの醸成】

■ICT の進展による共通の価値観にもとづくコミュニティの多様な展開

Facebook 等の SNS でつながるグループが地域づくりの起点となるなど、多様なコミュニティが形成され、地域への愛着が醸成されています。

図　年齢階層別 SNS 利用状況



資料　総務省「通信交通動向調査」

■福祉、子育て、防災等の地域における支え合い活動の広がり

少子高齢化の進展や家族・地域内でのつながりの希薄化などを背景に、高齢者だけでなく、出産、子育てなどの多様な課題を解決するため、地域における支え合い活動に広がりがみられます。

■環境保全、文化活動等における市民・団体・企業の自主的活動の活発化

全世界的に SDG s に関する取り組みが活発化しており、本市でも多くの企業や団体等で環境保護活動や社会貢献活動などサスティナブルな社会への取組みを推進しています。

【多様性の進展】

■観光、就労等における国際化の進展

本市においても、インバウンドやインターンなどにより外国人観光客や労働者が増加しており、国際化が進展しています。

■ダイバーシティの進展

差別の解消や個性の尊重等のダイバーシティの進展により、価値観の多様化や多くの文化が共生する社会へ変化しています。

【災害リスクの増大】

■自然災害リスクの増大と対策の強化

近年、世界各地で災害による被害が増大しており、災害対応の強化は本市にとっても喫緊の課題になっています。

■地球規模の環境配慮対策の強化

地球温暖化やオゾン層の破壊、熱帯雨林の減少など地球環境問題を解決するため、世界全体で温室効果ガス排出量の削減や再生可能エネルギーの利用等の環境配慮対策を進めています。

【インフラの充実・維持】

■鉄道、道路の広域交通ネットワークの充実

羽越新幹線の整備など、広域交通ネットワークの整備が進むことで、更なる交通利便性の向上が見込まれます。

■公共施設、商業等大規模施設の老朽化

本市の公共施設や大規模な商業施設において老朽化が進み、施設の更新が必要になってきます。

■社会インフラの老朽化

本市の社会インフラは高度経済成長期以降に集中的に整備されたものが多く、更新時期を迎えるインフラは加速度的に増えていくことが見込まれます。

図　建設後 30 年以上が経過するインフラ系施設の割合

	2016年3月	2026年3月	2036年3月
道路・林道 ［約総延長：1,837km］	約55%	約68%	約81%
橋梁 ［845本］	約53%	約77%	約96%
公園 ［198園］	約53%	約82%	約93%
上水道 ［総延長：1,367km］	約34%	約68%	約96%
下水道・集落排水管渠 ［総延長：924km］	約9%	約41%	約91%

資料　鶴岡市公共施設等総合管理計画

2. アフターコロナを見据えた変化・新たな条件

新型コロナウイルス感染症の影響により、これまでの生活は大きく変化しました。ニューノーマルと言われる新しい生活様式が注目され、将来のまちづくりを考えるうえで次のような変化、条件を踏まえて検討していく必要があります。

■人の移動が必要なものに限定

コロナ禍において、人との接触を避けるため、人の動きは必要なものに限定されるようになりました。

■買い物、外食等の変化

ネットショッピングの利用者やテイクアウトに対応した飲食店が増加し、コロナ禍において買い物や外食のあり方に変化がみられます。

■屋内空間利用・スペースの変化

コロナ禍において、1 人当たりの必要床面積が増加し、ゆとりある空間の確保など屋内空間の利用に変化がみられます。

■テレワーク等の進展による働き方の変化

緊急事態宣言を受けて、多くの企業がテレワークを導入し、働き方やオフィスのあり方が変化しています。

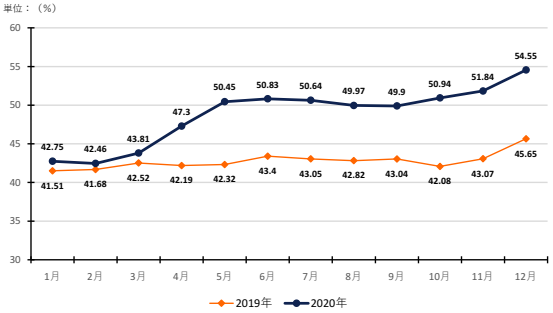
■会社、学校等人と人の繋がり方の変化

人と人の繋がり方が、対面の物理的な繋がりから、オンラインでの繋がりへと変化しています。

■デジタルファーストの一層の強化

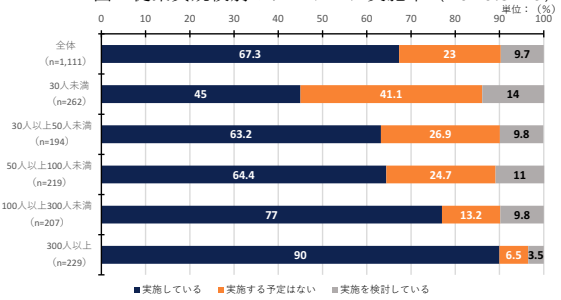
行政手続きのオンライン化など、情報通信技術を活用した整備が進められ、デジタルがより暮らしに身近なものとなっています。

図　ネットショッピングの利用世帯の割合の推移



資料　家計消費状況調査

図　従業員規模別のテレワーク実施率（2020.5～6）



資料　東京商工会議所

3. 将来の生活・社会像

将来において配慮すべき動向・条件、アフターコロナによる変化・新たな条件を踏まえ、主に駅前地区における将来の生活・社会像を以下のように描きます。

暮らし

多様な価値観を認め合う

豊かな暮らし

- ゆとりの生活リズム、多様なライフスタイル
- ものの消費からコトの消費、シェア社会
- 快適性を生む情報社会、AI 社会

図　駅前に設置されたデジタルサイネージの様子

働き方 働く場所

たくさんの職業、働く場所、休み方から

自分らしい、ちょうどいい働き方

- どこでもいつでも働ける環境
- イノベーションを創出する多様な交流・場
- ゆとりある業務スペース、小規模なオフィス
- 子供を持つ女性や高齢者が働き易い環境

図　コワーキング・スペース『エキイチ』の様子

日常

楽しみややりがいにあふれ、

ケの日もちょっとした幸せを感じられる生活

- 飲食や買い物を楽しむ街なか
- 居心地の良い場所で過ごすゆとりの時間
- 地域社会との関りや趣味を楽しむ場
- 社会貢献やセカンドキャリアの活動
- 利用しやすい公共交通

図　動画配信したパパっとおうちで魚ごはん講座の様子

教育 学習

互いに刺激し、教え合う

大人も子供も一緒に学び続けられる環境

- オンラインによる教育学習
- 学び合い、ふれ合いのバランスのある教育
- 実践、参加を通じた学習や体験活動
- 地域社会とつながる多様な学び場

図　タブレットを使用して学習する様子

若者

学び、身に付け、交流し、

鶴岡から世界へとつながる若者

- 学校、生活、遊び等取り巻く環境の ICT 化
- 学び、遊びなどの交流、ふれ合いの環境
- 職業、働き方の多様な体験・選択

図　大学生がオンライン授業に取り組む様子

余暇観光

住む人も訪れる人も

鶴岡の「豊かさ」を感じられるハレの日

- 活発なスポーツ、レクリエーション等の活動
- オンラインと現実体験が併存する余暇
- 歴史、文化等を楽しむ街なか観光
- インバウンドに依存しない観光

図　オンライン新酒飲み比べの様子

子育て

地域で健やかに成長し、

子どもたちの声が響くまち

- 時間や住空間にゆとりのある家庭環境
- ICT によるグループや施設等との情報共有
- 健やかに育つ生活環境

図　まんまルーム子育て講座の様子

健康福祉

10年後も笑顔でいられるよう、

子どもからお年寄りまでの健康的な生活

- 地域で健康・福祉を支える社会
- 健康を維持する生活環境、生活スタイル
- 感染症対策、医療情報の ICT 化

図　湯田川ヘルスケアサークルの活動の様子

4. 将来の生活・社会像における駅前のあり方

少子高齢化やデジタル化、グローバル化等の社会経済の進展、人々の価値観やライフスタイル等生活の変化等に伴い、駅前地区の将来の生活・社会像は大きく様変わりすることが予想され、駅前地区の位置づけ、役割や求められる機能も変化することが考えられます。たとえば、駅前地区では「都市の中心が駅前でなくてもよくなる」、「駅前に行く価値がないと足を運ばなくなる」などといったことも将来には想定されます。

駅前地区は、現状及びこれからの時代の変化を見据えて、駅前に訪れるための「新たな用事」をつくることが必要であり、「駅を主に利用する高校生が利用したくなる場所、高校生を中心に子育て世代、高齢者さらに観光客が相乗して楽しめる場所」へ変化させることで、次世代型の発展を進めていくことが可能であると考えます。

このような考えをもとに、鶴岡市全体でほんとうの豊かさ、暮らしやすいまちを実現するため、将来の駅前地区のあり方、姿を以下のように考えます。

- ■高校生が気軽に集い憩い、交流し、集うことができる場
- ■高校生が地域の各種事業の体験や様々な分野で活躍できる機会を提供する場
- ■若者が主体的にまちづくりに関われる場
- ■市民が趣味、学習、教育など多様な文化活動を楽しめる場
- ■女性の活躍を支援する場
- ■社会や働き方の変化に対応した多様な働く場や起業・創業を支援する場
- ■個性的で多様な店舗、飲食店、宿泊施設などによる、訪れたくなる歩きたくなる街
- ■人々が憩い、交流を楽しめる空間や景観に配慮した空間
- ■アクセス、乗換え等の人の移動が円滑に行える安全、快適な移動環境

5. 駅前まちづくりのターゲット

現在の鶴岡駅の利用の主役は高校生です。ビジネスや観光による鶴岡駅の利用もみられますが、利用者の約６割は高校生となっています。さらに、高校生の鶴岡駅前地区の利用目的をみると、通学だけでなく、飲食、買い物、カラオケなど多様な目的で利用しており、高校生にとって駅前地区は馴染み深い地区であることが分かります。

一方、前項の駅前のあり方で示すように、将来の駅前地区は、高校生が中心に駅前を利用するその他子育て家族やセカンドステージを楽しむ高齢者、さらには観光客を巻き込んで、学び、活動、交流、発信を主な機能とする拠点を形成していくことが考えられます。

駅前まちづくりは、このような考えをもとに、鶴岡市の未来を担う世代であり、将来にわたる継続的なまちづくりの主役となる高校生と子育て家族、高齢者、観光客をターゲットに据えて将来像を定めます。

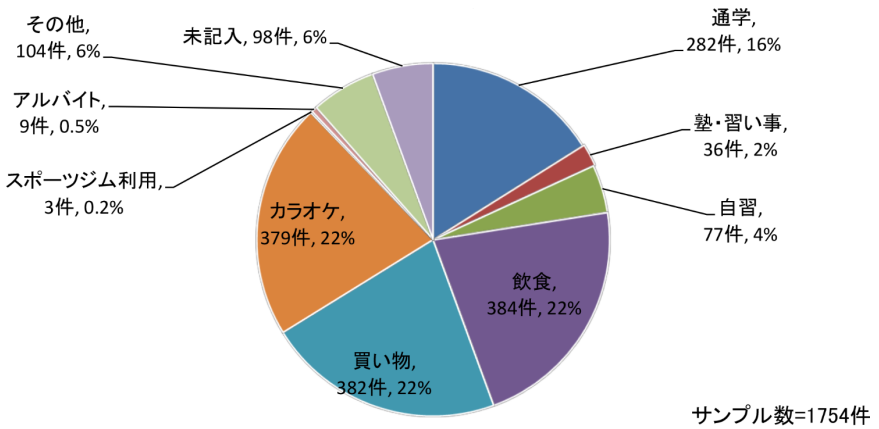
■高校生　（駅の主な利用者）（持続可能な都市を実現する世代）

■子育て家族　（持続可能な都市を実現する世代）（日中の主な活動世代）

■高齢者　（社会参加が期待される世代）

■観光客　（駅前を利用する市外人口）

■鶴岡市内の高校生を対象に実施したアンケート結果
（駅前エリアをどんな時・用事で利用するか）



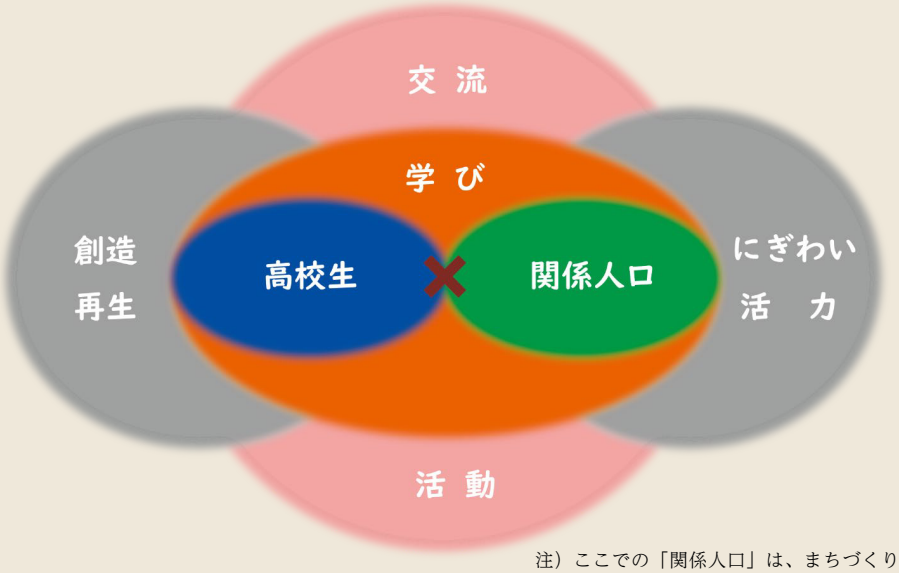
第3章　駅前地区将来構想

1. 駅前地区の将来像

駅前地区を主な駅利用者である高校生が集い、学び、交流する「学びのサードプレイス」として再構築します。デジタル化やグローバル化の進展等、時代の変化にあわせて、高校生が地域に関わり、そして未来につなぐ取り組みが持続する学びの場、いわば「令和の藩校」を、学びのサードプレイスの中核的な機能として位置付け、真に豊かで暮らしやすい鶴岡のまちづくり拠点として形成し、関係人口の増加を目指します。

コンセプト：「人とまちを育てる場」＝いわば「令和の藩校」
まちづくりの方向性：第三の居場所＝「学びのサードプレイス」

- 高校生が集い使う、にぎわいのある「駅前」
- 学びの場、活動の場にあふれる「駅前」
- デジタルで広がり、新たな創造を生む「駅前」
- 歴史・文化の地から（力（ちから））、世界とつながる拠点「駅前」
- 高校生の愛着が育ち、誇りを持てる「まち」



注）ここでの「関係人口」は、まちづくりのターゲットである高校生の学びや活動等とつながりを持つ人をいう

2. まちづくりの方針

方針１　高校生の学習、コミュニティ及び活動、活躍の場をつくる

⇒ 学び、サードプレイス、自主自立、社会参画

情報技術の発展に伴い、高校生等の学習の場が自宅（ファーストプレイス）、学校（セカンドプレイス）以外に求められています。地域そのものを学習の場さらには知識創造の場として捉え、高校生の誰もが気軽に利用できる第３の学習の場（サードプレイス）及び休憩、憩い、集うことができる場を提供するとともに、地域の産業、経済を学び、社会・経済活動への参画やインターン等職業体験できる機会を支援、提供します。

方針２　活力と創造が生まれ、持続・進化するまちをつくる

⇒ 再生・活性化、持続可能、次世代、コラボレーション

鶴岡市が持続的に発展する次世代につなぐまちづくりは重要なテーマです。まちを使って高校生を育て、高校生がまちを育てる機運を醸成し、合わせてアイディア等が想起される交流の場や駅前の人・分野を超えて地域と交流、マッチングできる機会を提供します。

方針３　市民の学習、教育、起業など学び、創成の場をつくる

⇒ 人生 100 年、価値観、市民文化、働き方、ライフスタイル

駅前を利用している子育て家族や観光客また高齢者は、日常的な地域活動の中心です。人、地域を豊かにする学びや文化活動の中心として、高校生のほか多様な人材が参加する生涯学習の場やリカレント教育の場、機会を創出します。また、新たな働き方や生活様式に対応して、起業・創業支援の場、多様なオフィス機能を提供します。

方針４　人・地域が連携し人を惹きつけ、集まる、魅力あるまちをつくる

⇒ 個性、多様性、快適性、景観、女性、地域資源

大規模ショッピングセンター、インターネットショッピング、通販等が買物の主流となっている中で、食やコト等の地域資源を活用した新しい商業が動き出しています。地域にある魅力的な食や文化、建物等の地域資源を活かして、楽しく快適に街歩きができる空間を創造します。また、インターネットを通じたこれらの情報発信や交流、個人から地域におけるグローバル化を推進します。

方針５　周辺の地域資源と連携し、地域の価値を高める

⇒おもてなし、食文化、地産地消、連携、周辺商店街

国内観光及びインバウンドの需要は依然潜在的に高く、産業振興等活性化のためにも観光の復調が期待されています。既存の観光案内拠点を活かして情報案内、コンシェルジュ機能等を強化し、豊かな資源、食文化の発信や販売、地元食材を活かした飲食を提供するとともに、快適な来訪空間を創出します。

方針６　誰もが楽しみ、利用しやすく安全な環境をつくる

⇒憩い、イベント、空間、安心、防災、環境、バリアフリー

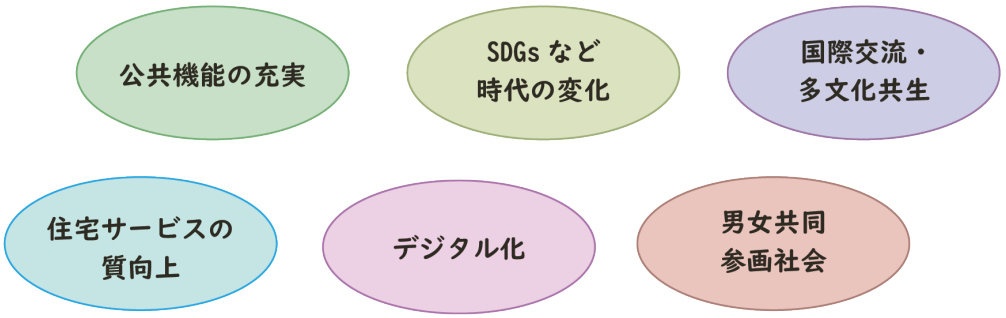
駅前は不特定の多くの人々が利用し、今後一層の利用、来訪が期待されています。駅前を利用するすべての人々が憩い、交流することができる空間を創出し、災害に強い安全、安心でバリアフリーに配慮した快適な環境を整備します。

方針７　人、車が円滑に移動、利用できる交通ターミナル拠点をつくる

⇒移動円滑、２次交通、歩行環境、情報提供

公共交通は高齢社会、環境配慮社会に対応した重要な移動手段です。交通ターミナル拠点として、鉄道、バス、タクシー等利用・乗換の機能・利便性を高めるとともに、観光地へアクセスする２次交通や安全で快適に移動できる環境を整備します。

まちの機能を構築する上で必要な着眼点



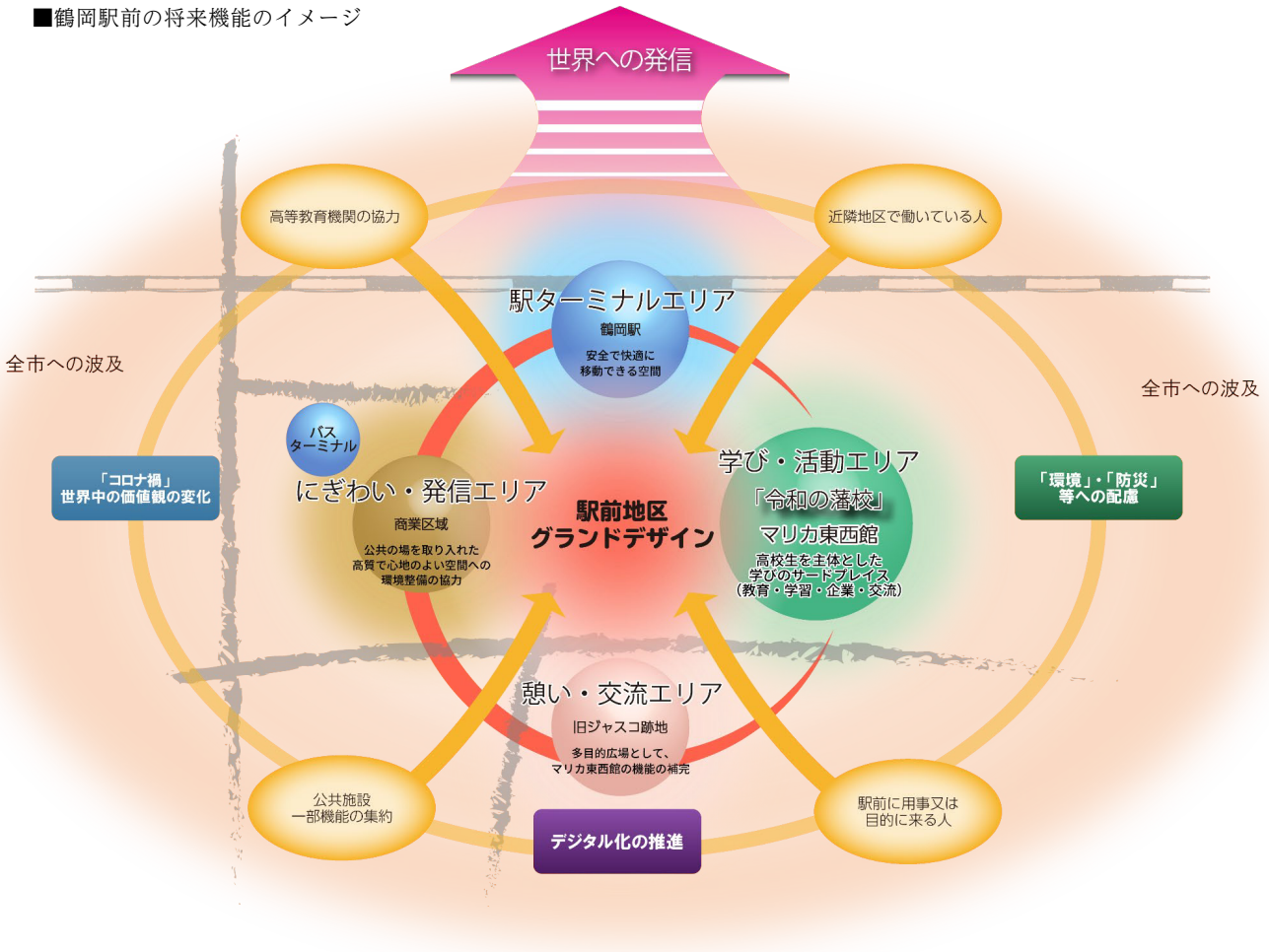
3. 想定される導入機能

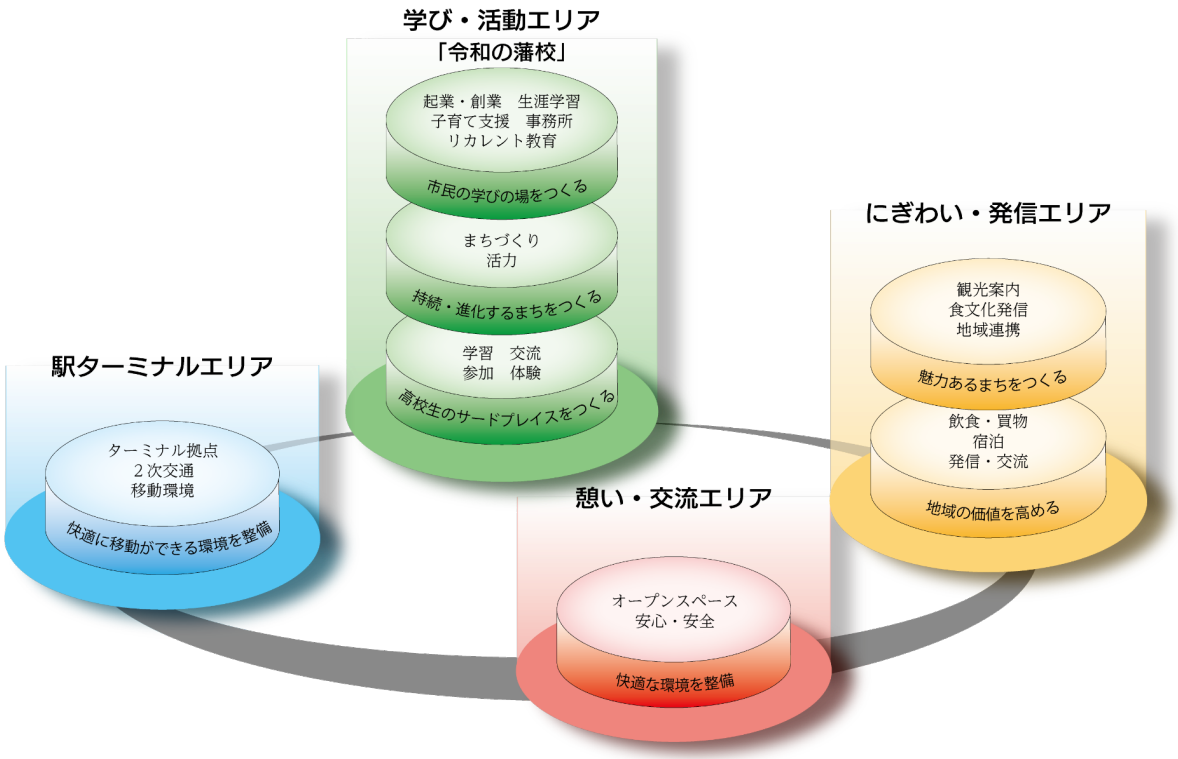
まちづくりの方針に基づき、駅前地区に想定される機能は以下のとおりです。

方針	導入機能	ゾーン
1．高校生の学習、コミュニティ及び活動、活躍の場を作る	○学習：高校生の誰もが利用できる学習の場、機会 ○交流：高校生が気軽に休憩、憩い、集うことができる場、機会 ○参加：駅前周辺の商業、福祉、観光等事業活動への参加 ○体験：職業として地域の産業、経済を考え、インターン等体験できる場、機会	学び・活動エリア
2．活力と創造が生まれ、持続・進化するまちをつくる	○まちづくり：高校生が駅周辺のまちづくりに参画 ○活力：駅前及び周辺地域との創造的なコミュニケーションの場	学び・活動エリア
3．市民の学習、教育、起業など学び、創成の場をつくる	○生涯学習：市民誰もが利用できるカルチャーセンター、オープンカレッジ等 ○リカレント教育：サテライトキャンパス等による社会人などの教育の場 ○起業・創業：起業からインキュベートまで起業・創業支援 ○事務所：小規模からコワーキングなどの多様なオフィス機能の提供 ○子育て支援：子育て、一時預かり等による女性の活動、社会参加の支援	学び・活動エリア

方針	導入機能	ゾーン
4．人・地域が連携し人を惹きつけ、集まる、魅力あふれるまちをつくる	○飲食・買い物：地域資源を活かした快適な街歩きができる空間の形成 ○宿泊：既存機能の充実と新たな宿泊形態・様式に対応した宿泊の提供 ○発信・交流：インターネットを通じた情報発信・交流やグローバル化	にぎわい・発信エリア
5．周辺の地域資源と連携し、地域の価値を高める	○観光案内：観光客への情報提供、コンシェルジュなど観光案内拠点の強化 ○食文化発信：地場の物産品の販売、飲食の提供など鶴岡の食文化の発信 ○地域連携：駅周辺商店街へと人が波及する地域連携と環境の整備	にぎわい・発信エリア
6．誰もが楽しみ、利用しやすく安全な環境をつくる	○オープンスペース：憩い、遊び等様々な利用できる安全で快適な空間の創出 ○安全・安心：防災等に配慮した安全・安心な環境の整備と交流の場の創出	憩い・交流エリア
7．人、車が安全・安心で円滑に利用できる交通環境をつくる	○ターミナル拠点：人、バス等が円滑に乗換、移動できる交通結節機能の維持向上 ○２次交通：駅と市内の主要施設、観光地等を結ぶ連絡交通の充実 ○移動環境：歩行者、自転車が安全で快適に移動できる環境の整備	駅ターミナルエリア

■鶴岡駅前の将来機能のイメージ





第4章　駅前地区等の整備・運営方針

1. 駅前地区の整備方針

駅前地区は、鶴岡市の中心市街地における玄関口としての役割を担うだけではなく、鶴岡駅を主に利用する高校生等が集い、学び、憩い、交流する「第三の居場所」をまちづくりの方向性として、鶴岡市の未来に向けた新たな創造の拠点として位置づけました。

そして、駅前地区を大きく４つの機能で構成し、それぞれを「学び・活動エリア」、「にぎわい・発信エリア」、「憩い・交流エリア」、「駅ターミナルエリア」として配置しました。その中でも「学び・活動エリア」、いわば「令和の藩校」を中核的なエリアとして位置付けます。

駅前地区の整備にあたっては、対象エリアである「学び・活動エリア」の先行的な整備を進める一方、その他の３エリアの機能充実とエリア間の連携を強化することで、駅前地区全体の魅力を高めていきます。

また、公共空間の整備や民間施設における半公共空間の創出による良質なオープンスペースを確保し、合わせてバリアフリー化による安全で快適な歩行空間を確保することにより駅前地区全体の回遊性の向上を図り、「学び・活動エリア」を核として各エリア間の連携強化を進めます。

駅前地区の整備にあたっては、SDGs、デジタル化、多文化共生など、社会の変化に対応しながら、駅前地区の総合的な再生、整備とヒト・コト・モノが交流するまちづくり活動を推進・促進することで、駅前地区全体の価値を高め、民間投資を呼び込む力を高めるとともに、鶴岡市のにぎわいを牽引するエリアを形成していきます。

○「学び・活動エリア」

主に高校生をターゲットとした学習の場や交流の場の創出を図り、活動の拠点づくりに取り組みます。

その後、高校生の活動を次のステージに発展させ、高校生の企画・運営による学び・創業や高校生による駅周辺のまちづくりの参画を促します。

同時に、市民の起業や創業を支援する機能の導入を図ります。

○「にぎわい・発信エリア」

「学び・活動エリア」における高校生の活動と連携し、観光案内拠点の強化や鶴岡の食文化の発信に取り組みます。駅前地区に集まった人々が商店街へと波及する地域連携を進めます。

また、歩行空間の充実等により快適な街歩きが楽しめる空間づくりを進めるとともに、既存機能の充実と新しい生活様式に根差した環境整備を促進します。

○「憩い・交流エリア」

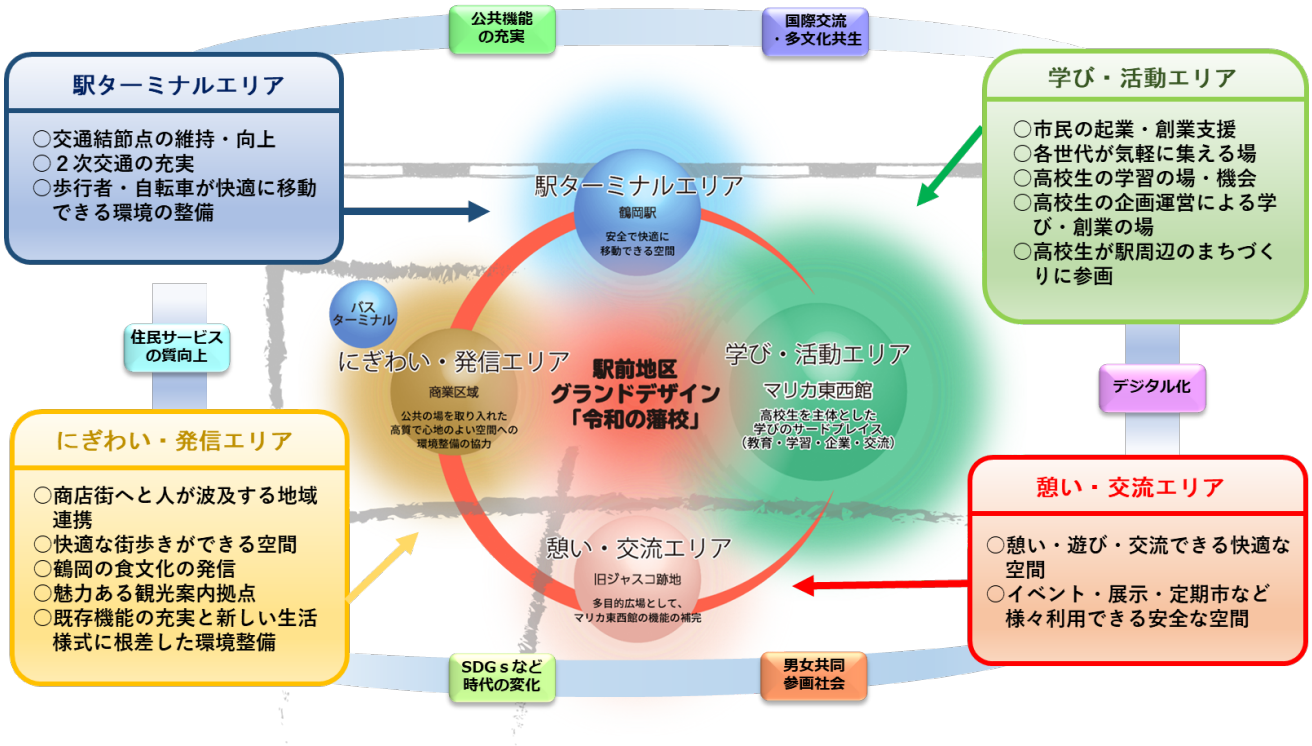
高校生をはじめとした市民の集い、交流をさらに促進させるため、みんなが憩い・遊び・交流できる快適なオープンスペースを整備するとともに、イベントや展示、定期市などの運営によるにぎわいの創出を図ります。

○「駅ターミナルエリア」

交通結節機能の維持・向上、２次交通の充実を図り、さらに、観光案内拠点と連携した観光促進を図ります。

歩行者・自転車が快適に移動できる空間を整備し、駅前地区に市民等が気軽に集まりやすい環境づくりを進めます。

■駅前地区の整備方針図


公共機能の充実
国際交流・多文化共生
駅ターミナルエリア
○交通結節点の維持・向上
○２次交通の充実
○歩行者・自転車が快適に移動できる環境の整備
学び・活動エリア
○市民の起業・創業支援
○各世代が気軽に集える場
○高校生の学習の場・機会
○高校生の企画運営による学び・創業の場
○高校生が駅周辺のまちづくりに参画
駅ターミナルエリア
鶴岡駅
安全で快適に移動できる空間
バスターミナル
にぎわい・発信エリア
商業区域
公共の場を取り入れた高質で心地のよい空間への環境整備の協力
駅前地区グランドデザイン「令和の藩校」
学び・活動エリア
マリカ東西館
高校生を主体とした学びのサードプレイス（教育・学習・企業・交流）
憩い・交流エリア
旧ジャスコ跡地
多目的広場として、マリカ東西館の機能の補完
住民サービスの質向上
デジタル化
にぎわい・発信エリア
○商店街へと人が波及する地域連携
○快適な街歩きができる空間
○鶴岡の食文化の発信
○魅力ある観光案内拠点
○既存機能の充実と新しい生活様式に根差した環境整備
憩い・交流エリア
○憩い・遊び・交流できる快適な空間
○イベント・展示・定期市など様々利用できる安全な空間
SDGｓなど時代の変化
男女共同参画社会

2. 学び・活動エリア拠点の整備・運営の考え方

コンセプトで示したいわば「令和の藩校」とは、未来の鶴岡市を担う人材育成の場です。駅前構想において、中核となる重要な機能であり、駅前地区の将来像の実現に向けては、対象エリアである「学び・活動エリア」を拠点として、にぎわいの創出を図っていきます。

高校生を主なターゲットとした活動拠点づくりは、他に類をみない本市の新たな取り組みとして、これから大きく変化する時代に柔軟に対応しながらその活動内容を変化・発展させていく機動的なものです。

また、駅前地区の整備にあたっては、社会的な需要の変化に対応しながら、既存施設を活用した段階的な整備及び機能の導入、強化を図っていきます。

「学び・活動エリア」で展開する「令和の藩校」の考え方

「令和の藩校」とは、いわば、鶴岡の未来を創造する人材育成のための場です。

鶴岡には、庄内藩校致道館をルーツとした「天性重視・個性伸長」、「自学自習」、「会業の重視」、「心身鍛錬」という教学精神が受け継がれており、これは現代にも通じる教育観であると考えます。

「庄内藩校致道館」をルーツとした「徂徠学」

①天性重視・個性伸長
一人一人の素質や得意な能力を伸ばす教育

②自学自習
学問は人から教わるものではなく、自分で考え学びとるもの
・能力に応じた等級性・個別的指導
・実学活学:学んだことを実践に活かす

③会業の重視
小集団での討論の場

④心身鍛錬
釣道（磯釣りなど）に見られる文武両道の精神

未来のまちと人をつくる「令和の藩校」
(学びのサードプレイス)

①天性重視・個性伸長
デジタルを使いこなし、世界で通じる個性豊かな人材（次世代リーダー、起業家等）を育成する

②自学自習
まちに学び、まちに活かす

③会業の重視
年齢や立場関係なく、ゼミナール形式で、多世代でつながり学び合う

④心身鍛錬
豊かな自然に身を置き、体験から学び行動する

駅前地区では、この教学精神にデジタル社会やグローバル化の進展などの新たな視点を取り入れた、現代・未来に向けた『学びの場』・『人材育成の場』・『まち育ての場』として活動拠点を整備・運営していきます。

「学びの場」
「人材育成の場」
「まち育ての場」

＝

・高校生を主体に、多様な市民が学び合える場所
・市民の経験を活かし、実践できる場所
・鶴岡の今と未来をつなぐ場所
・鶴岡の元気が集まる場所

郷土愛の高まり、シビックプライドの醸成、鶴岡応援団の増加

関係人口の増加

① 学び・活動エリア拠点のストック活用方針

学び・活動エリアの拠点施設として、市所有施設であるマリカ東館の活用が可能です。マリカ東館は、駅前地区の拠点施設かつ市所有の施設であり、学び・活動エリア拠点としての機能を展開するために活用可能な床面積を有しています。

また、マリカ東館は老朽化が進行していますが、ライフサイクルコストの試算の結果、長寿命化による効果的な使用期間は最長で現在から 26 年後の令和 29 年（2047 年）までとなり、設備等の改修により、最低でも 15 年後までは施設全体を有効に活用できると判断します。

なお、マリカ西館については、建物に関する情報提供を進めつつ、マリカ東館との連携を図るため、管理組合の意向を確認しながら、市が所有する床の活用を図っていきます。

② 学び・活動エリア拠点の整備・運営期間の考え方

学び・活動エリアの拠点整備・運営を進めるにあたっては、段階的に期間を設定します。

■学び活動エリア拠点の整備・運営期間の考え方

	期間の考え方	評価・見直しの考え方
短期(初動期) ：５年間 令和４年～８年 （2022～2026）	社会実験・検証による「令和の藩校」の中心となる施設を整備・運営	５年ごとに評価及び計画のローリングを実施
中期(発展期)：10 年間 令和９年～18 年 （2022～2026）	新たな取り組みによる事業の展開と他３つのエリアとの連携活動	
長期(調整期)：11 年間 令和 19 年～29 年 （2037～2047）	活動・事業の拡大と新たな施設整備に向けた調整・更新準備期間	評価・見直しを行い、社会的要求水準等にあわせて再整備等の時期を決定

3. 学び・活動エリア拠点の整備・運営方針

整備・運営の考え方に基づき、「学び・活動エリア」の拠点施設となるマリカ東館及び旧ジャスコ跡地の整備・運営方針を示します。

マリカ東館

1）短期（初動期）の運営方針

マリカ東館は、いわば「令和の藩校」の拠点として、幅広い世代への「学び」を提供します。

具体的には、まず、社会実験等により高校生をターゲットとした学習・交流の場を創出するプログラムの導入を検討し、社会実験の効果検証によりプログラムの改善検討を行い、交流・学習機能の導入、整備を行います。

東京大学駒場アクティブラーニングスタジオの様子

資料：KALS (https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/kals/)

さらに、いわば「令和の藩校」の運営の仕組み・枠組みの構築や民間活力の導入を視野に入れた体制（P-PFI 等官民連携）の検討を行います。

想定利用シーン
○高校生によるスマートフォン教室
○高校生による鶴岡をテーマとした Youtube 配信
○放課後の高校生の情報交換
○生涯学習講座の開催

事例：シニア向けスマホ・タブレット教室の学生講師ボランティアの様子

資料：activo (https://activo.jp/articles/47178)

事例：鶴岡工業高校による PR 動画配信 (Youtube)

資料：Youtube (https://www.youtube.com/watch?v=JuhIomRERYA)

「憩い・交流エリア」の旧ジャスコ跡地、マリカ広場はマリカ東館での活動を補完する広場としての活用を図ります。具体的には、発表・展示・イベントの場としての活用やにぎわい創出に向けた社会実験を実施します。

ジャスコ跡地

マリカ広場

想定利用シーン（ジャスコ跡地）	想定利用シーン（マリカ広場）
○下校後の学生の交流 ○子育て世代の情報交換 ○子どもの屋外遊び ○高齢者の軽運動等の健康づくり ○休日のイベント開催	○高校生による鶴岡の PR ○休日のイベント開催 ○観光情報の発信 ○バスや電車の待ち時間の休憩

事例：茨木市の跡地エリアの広場活用社会実験「IBARABO」の様子

資料：茨木市 HP

事例：北本駅前広場の社会実験「あきんど市 Bar」の様子

資料：北本らしい“顔”の駅前つくりプロジェクト
(http://kitamotoekimae.seesaa.net/article/293818909.html)

2）中期（発展）の整備・運営方針

【マリカ東館】

マリカ東館は短期（初動期）の取組結果を踏まえ、持続可能な運営体制の構築や新たな学び・交流機能の導入など、活動を継続・発展させるための事業展開を行います。

「学び・活動エリア」の中心拠点としての機能を充実させるため、運営形態に沿ったリノベーションを実施するとともに、マリカ周辺の機能との連携を図り、各機能の相乗効果を高めます。また、民間活力を取り入れた魅力あるコンテンツの充実を図ります。

【旧ジャスコ跡地】

旧ジャスコ跡地は、多目的に利用可能な広場として民間活力の導入等官民協働も視野に入れた整備を推進します。また、マリカ東館との一体的な事業展開の場として、人々が憩い、滞留し、交流できる空間の整備を推進します。なお、空間整備にあたっては、商業利用等の多様な使い方が可能な空間整備を検討します。

【マリカ広場】

マリカ広場は、人流が交差する場所でありマリカ東西館及び駅ターミナルエリアと連携し、目に見えるにぎわいを生み、活気あふれる場としての活用を図ります。

3）長期（更新期）の方針

マリカ東館、旧ジャスコ跡地ともに、これまでの事業展開の評価・見直しを行いながら、社会的要求水準等にあわせて再整備等の時期を検討していきます。

4）事業手法の検討

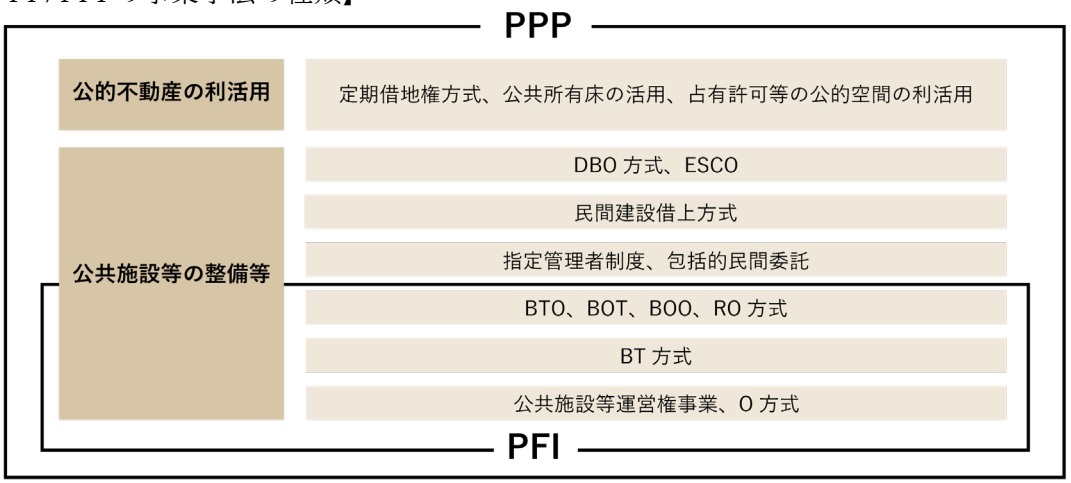
鶴岡駅前の施設整備にあたっては、下表のような事業手法が考えられます。中期の整備を進める際には各事業手法の特徴を踏まえ、適切な事業手法を選定していきます。

	公設公営	公設民営	公民連携（PFI）	民設民営
概念図				
概要	・公共事業として市が施設整備を行う。 ・公共施設として市が施設運営を行う。 ・建設費用負担は、すべて市。	・公共事業として市が施設整備を行う。 ・指定管理者制度により民間に施設運営を委託する。 ・建設費用負担は、すべて市。	・市が指定した条件下で民間が施設整備を行う。 ・整備後は、民間等が施設運営を行う。 ・建設費用負担は、手法によって民間が負担する場合と、最終的に市が負担する場合がある。	・民間が施設整備を行う。 ・整備後は、民間が施設運営を行う。 ・建設費用、管理費用負担は、すべて民間。補助金方式の場合、市が一部負担。
メリット	・利用者にとっては、安定感・公平感がある。	・施設運営に民間のノウハウを活用することで、運営の効率化を図ることができる。	・施設運営に民間のノウハウを活用することで、運営の効率化を図ることができる。 ・市の財政負担を抑える又は平準化することができる。	・施設運営に民間のノウハウを活用することで、運営の効率化を図ることができる。 ・民間裁量で整備をすすめるため、建設期間が短い。 ・市場環境変化に対応しやすい。 ・市の財政負担は抑えられる。
課題	・公共施設として整備するため、建設・運営の自由度は低い。 ・市の初期投資が大きく、また、直営による運営コストもかかり、長期間に亘る市の財政負担が発生する。	・公共施設として整備するため、建設・運営の自由度は低い。 ・設置主体である市と協議が必要な場面もあり、建設に時間を要することもある。 ・市の初期投資が大きく、また、指定管理による運営コストが発生する可能性がある。	・公共施設として整備するため、建設の自由度は低い。 ・当手法の適用は、採算の見通しが立ちやすい種類の施設に限られる。	・意欲及びノウハウがある民間事業者の参画が必要。 ・当手法の適用は、採算の見通しが立ちやすい種類の施設に限られる。 ・民間は採算を重視した建設・運営を行うため、市民ニーズに広く対応できない場合がある。

PPP/PFI の事業手法の種類

PPP（Public Private Partnership）とは行政サービスの向上・効率化を目指し、行政と民間が連携し公共施設やインフラなどの整備・運営を行う考え方です。

【PPP/PFI の事業手法の種類】

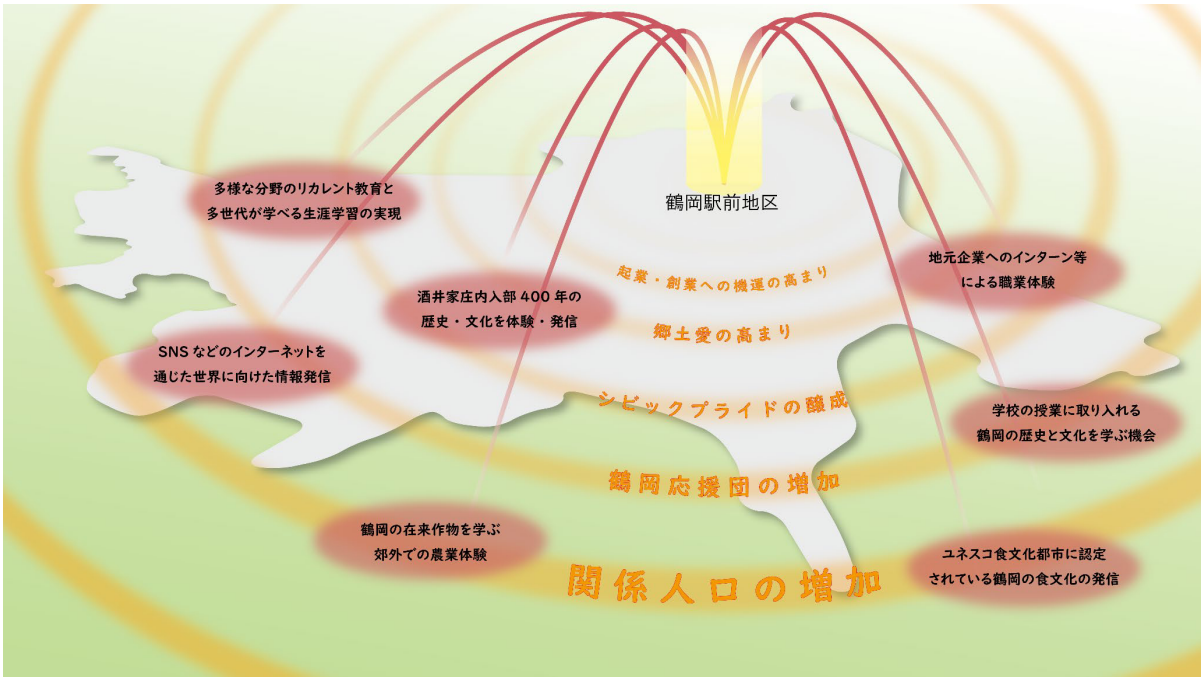


5）駅前地区の整備効果の波及

本構想は、本市が抱える様々な課題の中でも、喫緊の課題である鶴岡駅前を対象としたものですが、市全体でも人口減少を背景としたにぎわいの低下などの課題がみられます。

そこで、駅前地区を鶴岡市のにぎわいを牽引するエリアとして整備し、駅前地区で生まれたにぎわいを市全体に波及させていきます。

■駅前地区から鶴岡市全体へ効果の波及のイメージ図



資料編

1. 城下のまち鶴岡将来構想鶴岡駅前地区将来ビジョン策定の経過

開催年月日	会議内容等
R2.7.1	第１回　城下のまち鶴岡将来構想策定委員会 構想策定について
R2.7.31	第１回　城下のまち鶴岡将来構想プランニングチーム会議
R2.9.15	第２回　城下のまち鶴岡将来構想プランニングチーム会議
R2.10.15	第２回　城下のまち鶴岡将来構想策定委員会 駅前地区まちづくりの方針・役割について
R3.3.19	第３回　城下のまち鶴岡将来構想策定委員会 駅前地区まちづくりの方針・機能等について
R3.5.19	第３回　城下のまち鶴岡将来構想プランニングチーム会議
R3.7.16	第４回　城下のまち鶴岡将来構想プランニングチーム会議
R3.7.30	第４回　城下のまち鶴岡将来構想策定委員会 駅前地区の整備方針について
R3.11.17	第５回　城下のまち鶴岡将来構想プランニングチーム会議
R3.2.○～○	パブリックコメント
R3.3.10	第５回　城下のまち鶴岡将来構想策定委員会

2. 城下のまち鶴岡将来構想策定委員会

【委員】

氏　名	職　　名	備考
上木勝司	鶴岡市都市計画審議会　会長	
矢口哲也	早稲田大学　教授	
加藤捷男	鶴岡商工会議所　会頭	
上野隆一	出羽商工会　会長	
佐藤泰光	全国農業共同組合連合会山形県本部 庄内地区担当次長	
前田直之	一般社団法人東北ニュービジネス協議会やまがた支部 支部長	
國井英夫	株式会社庄交コーポレーション　代表取締役社長	
丸山貴光	東日本旅客鉄道株式会社　鶴岡駅長	
酒井忠順	一般社団法人荘内酒井歴史文化振興会　代表理事	
宮澤巌	独立行政法人都市再生機構 東日本都市再生本部 事業推進部 担当部長※	
山口朗	一般財団法人鶴岡市開発公社　理事長	~令和３年10月
阿部真一	一般財団法人鶴岡市開発公社　理事長	令和３年12月~
三浦秀人	鶴岡駅前商店街振興組合　理事	
伊藤秀樹	マリカ西館管理組合　副理事長	
佐々木邦夫	鶴岡市コミュニティ組織連合会 第五学区コミュニティ振興会 会長	
阿部貴一	鶴岡市町内会連合会　末広町駅前町内会　会長	
秋野公子	一般社団法人山形県建築士会 鶴岡田川支部 事務局	令和３年度
大久保紀子	社会教育委員　副委員長	令和３年度

※令和３年度時点での所属、役職を掲載

【アドバイザー】

氏　名	職　　名
中山　ダイスケ	東北芸術工科大学　学長
古　田　秘　馬	株式会社 umari　代表取締役
陳　内　裕　樹	内閣府　クールジャパン地域プロデューサー